

繪畫・彫刻等の美術の發達においても、恐らく文學の場合と同様の事情があつたのではないかと思われる。しかしこれについてはなお別の觀點から考えて見なければならぬ。

三 隋唐文化の世界性

隋唐文化の第二の特色は、その世界性ないし國際性である。兩漢以來中國の文化は、次第に多くの外來要素を加えながら發達して來た。そうして隋唐時代、殊に世界帝國の成立を見た唐代に至つて、最も多量の外來要素を攝取・融合して、よく絢爛たる世界的・國際的文化を作り上げ、これを東亞の諸民族に傳えたのである。中國文學の最高峰といわれる唐代の文學、特に詩などは別として、中國固有文化の發達という點からすれば、些か寂寥の感がないでもない。隋唐文化の最も著しい特色は、寧ろその世界性・國際性に在ると言わねばなるまい。それならばこの時代に、果して中國へ如何なる種類の外來文化が流入し、中國文化に如何なる影響を及ぼしたのであつたか。

風俗 隋唐時代には貿易を始め種々の目的で中國に來往し、もしくは來住する外國人が甚だ多かつた。國都長安の如きは、ために世界都市・國際都市たる觀を呈したが、このような時代の環境において、漢民族が僑居流寓の外國人——その中で最も多數を占めたのが北族であり、數の上ではこれに及ばなかつたとしても、文化的に最も有力だつたのが西域人であることは更めて説明するまでもない——と接觸し、更には次第に融合して、風俗の上にもその影響を受けるに至つたものが少くなかつた。今その著しい二、三の事例を擧げて見ると、先ず第一に胡服の流行がある。胡服というのは北族乃至西域人、殊に西域人の衣服を意味し、具體的には唐代の土偶が、唐人・胡人を問